

『百人一首』 中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (九)

これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬも逢坂の関

蝉丸

〈歌意〉

「これがまあ、都から出て東へ行く人も、都へ帰る人も、ここで別れてはまた逢い、知っている人も知らない人も逢うという名の逢坂の関であるよ。」この歌は『後撰集』（雑・一〇九〇番）に出ています。

（蝉丸）

生没年未詳。平安時代前期の歌人。琵琶法師の祖として仰がれる琵琶の名手と伝えられています。

〈字母〉

これや 故の
ゆくも 可遍る毛

わ可連ては し

る 裳

しらぬ

もあふさ可の世幾

音符のような旋律に乗せて書いたように見えます。墨継ぎの行が芯になってバランスを取られているのが見て取れます。

（中村青藍）

中村素堂先生の書

大島香菊様提供